

# 星になった少年

2005(平成17)年5月26日鑑賞(東宝試写室)



監督＝河毛俊作／原作＝坂本小百合／脚本＝大森寿美男／音楽＝坂本龍一／出演＝柳楽優弥  
／常盤貴子／高橋克実／蒼井優／倍賞美津子（東宝配給／2005年日本映画／113分）

……タイに「留学」してゾウ使いの少年に……。そんなテツの夢みたいな物語が映画になったが、実はこれはすべて現実の話。知らなかったナア……。タイで厳しい訓練を受ける中、「ゾウ使いになれるのだったら若くして死んでもいい」とテツが言った言葉が、まさかホントになるとは……。？ あなたもきっと、人間の心の交流とは、そして子供の教育のあり方とは、と真剣に考えさせられながら、涙するはずだ……。

## 主人公はあの柳楽優弥君！

2005年の第58回カンヌ国際映画祭は5月11日から22日まで南仏のカヌで開かれ、ジャン・ピエールとリュックのダルデンヌ兄弟の『ザ・チャイルド』がパルムドール賞を受賞したことが5月23日付の新聞で報じられた。今年の作品は総体的に少し地味だったが、昨年（04年）の第57回カンヌ国際映画祭のパルムドール賞は、あの『華氏911』（04年）。

そしてあっと驚く大ニュースは、『誰も知らない』（04年）の主演、柳楽優弥君が日本人初最優秀男優賞を受賞したこと。この『誰も知らない』はホントに日本中が涙した名作中の名作だった。そして、この『星になった少年』の主演である哲夢（テツ）を演じるのが、その柳楽優弥。さあ、最優秀男優賞の優弥君がどんな演技を見せてくれるのか、楽しみだ。

## 原作者はテツのお母さん

この映画の原作となった『ちび象ランディと星になった少年』（文藝春秋刊）

は、坂本小百合氏が綴ったもの。そしてこの映画は、息子の命を失うという悲しい体験を含めた一風変わった彼女自身の人生体験の中から生まれたもの。すなわち、私と同じ1949年に生まれた坂本氏は、ファッションモデルとしてデビューし、それを引退した後、何と（再婚したことによって）動物プロダクションの経営に転身したとのこと。

そして長男の哲夢君が1992年11月10日に交通事故によって20歳で死亡した後は、1996年に私設の動物園「市原ぞうの国」をオープンしてその園長に就任し、さらに現在は哲夢君の夢であったゾウさんたちの楽園として、千葉県勝浦市に「勝浦ぞうの楽園」を建設中とのこと。女性ながら何とも破天荒な生き方があったものだ……。

### 私の大好きな常盤貴子

こんな原作者の坂本小百合＝小川佐緒里を演ずるのは私の大好きな常盤貴子。『赤い月』（03年）で、「日本版スカーレット・オハラ」とも称すべき大熱演をした彼女が、この映画では、仕事に追われ子供との心の交流が不足しながらも、どこかで子供との熱いつながりを持った、やさしくそして一風変わった母親像を見事に演じている。もっともこの映画の主人公はテツであり、母親はあくまでその支え役として登場するだけなので、長靴をはいて働いている姿だけしか見られないのはちょっと残念……。

母親が若い時のファッションモデル時代を回想するシーンでも入れば、常盤貴子の美しい姿を少しでも観ることができたのだが……？

### 男の子の教育論にも一石を……

テツはごく自然に小川動物プロダクションの中で動物たちと一緒に生活していたが、学校の同級生たちは、こんなテツが「動物臭い！」とちょっとしたイジメに……。姉の望（のぞみ）はそれを母親にアピールするが、当の本人はそんなことは一向に気にしていない。

そしてゾウのミッキーに続いて子ゾウのランディがやってくる中、飼育係の岩本さんから、タイにはゾウ使いの少年がいるという話を聞くと、急に目がキラキ

ラ。そして何と、熟慮(?)の末にゾウ使いになるためタイの「ゾウ学校」に行くと言い始めた。

頭から「そんなことは許さない!」と反対していた佐緒里だったが、佐緒里の母親の藤沢朝子(倍賞美津子)から、「あんただって好きなことをしてきたじゃないか!」と言われると、たしかにそうだから、返答に窮してしまった。そして「よし、行ってこい。どうせ1年ちょっとだ。行ってくれば本人が納得するワ」と素早い決断……。

つめ込み教育 VS ゆとり教育、学校教育 VS 家庭教育、その他教育論争にはさまざまなものがあるが、そんな議論をする際、このテツに対する佐緒里の決断(?)も参考にしてもらいたいものだ。男の子の教育論に一石を投じる、常盤貴子演ずる小川佐緒里が見せる教育論(?)に注目だ!

## 蒼井優への期待!

この映画には、『花とアリス』(04年)を観て大ファンになった蒼井優がテツ君の恋人(?)の絵美の役で登場する。その出会いは、動物たちを使ったイベントに絵美が参加していた時に訪れたが、絵美はこの時、動物を見せ物に使ってお金を稼いでいるイベントに嫌悪感を示していた。しかし、ゾウ使いのテツが心の底からゾウを愛し、ゾウと心を通わせていることを理解した絵美はこれに感動。そして以降、時々デートを重ねていた……はずと思われる。

涙を誘うのは、テツが死んだ後の屋根の上のシーン。あの有名なミュージカル『屋根の上のヴァイオリン弾き』のシーンのように、テツの写真を横に屋根の上に1人座っていた佐緒里を訪れた絵美は、佐緒里の隣に並んで語り始めた。ここで絵美から佐緒里に渡されたのは、テツが夢に見ていたゾウの楽園を描いた1枚の絵。「私はあの子のことを何もわかってやれなかった!」と泣き崩れる佐緒里に対して、絵美が「そうじゃない、テツ君は何よりもゾウの大好きなお母さんが大好きだったんだ」と語る姿は感動的。

短いシーンながらも、ここでの常盤貴子の「熱演」も見モノだ。この映画では蒼井優はチョイ役だが、近々主役級として登場し、日本映画を代表する女優に成長してもらいたいものだ。

## ゾウのお勉強と一緒にタイ語も……

私がタイ旅行に行ったのは2002年4月25日から29日。首都のバンコクと別荘地のパタヤーを中心とした、友人のご接待による超豪華な食事と超豪華なホテル・別荘での「殿様旅行」だった。そのため、普通の観光客が行く、この映画の舞台となった北部のチェンマイには行っていない。しかしこの旅行の中で、タイ語も、「おはよう」「ありがとう」をはじめ、「I Love You」などの必要不可欠(?)な最小限の言葉を覚えて、楽しい毎日を……?

この映画のために、柳楽優弥君がタイ語をかなり覚えたのは当然……? また、ゾウもタイ語を基本として覚えている(?)から、テツが日本に帰ってきた後、小川動物プロダクションで子ゾウのランディを調教するのもタイ語。「早く!」「前へ!」「あがれ!」等の単純なタイ語は私にも少しわかる感じ……?

この映画を観ると、ゾウがいかに賢い動物であるかよくわかるが、大人のあなたなら、それとともに少しはタイ語のお勉強もしたら……? 将来のタイ旅行の際にきっと役に立つよ……。

## 心暖まる象ドラマと人間ドラマに涙いっぱい!

この映画はテツと子ゾウのランディが心を通わせるドラマが興味の中心だが、実はそれを通じての人間ドラマを描くのがこの映画の狙い……? 思春期のテツ君がゾウ使いになるためのタイ「留学」を決意するについては、本人と母親の決断も大変だったが、この映画の人間ドラマはそれだけではない。ゾウ使いとして日本に帰ってきてからも、武田鉄矢主演のある映画(?)の撮影中に展開される、テツと義理の父親小川耕介(高橋克実)との「男の対決」も見モノ。

さらに母親の佐緒里とその母親の藤沢朝子との間のやりとりに見える、代々受け継がれてきた教育方針(?)も面白い。前述の佐緒里と絵美との屋根の上のシーンもまさに人間ドラマ。

このような人間ドラマがいっぱいつめ込まれた心暖まる映画がコレだ。そして何とんでも最大の高ライトは、1992年11月10日に交通事故のために死んでしまったテツ君の葬儀のシーンで見せる、ゾウたちの別れの儀式や表情。それらの

すべては、きっとあなたの涙を誘うはず……。

## ハリウッド大作『アレキサンダー』との共通点は？

この映画の中盤では、タイでのテツ君の「修行の日々」が描かれ、異国情緒たっぷり……？ ゾウの訓練のため母親ゾウと子ゾウとの「涙の別れ」をはじめ、チェンマイの山奥の美しい風景をバックに、さまざまな興味深いゾウの姿が描かれる。そして当然ながらゾウの数は1頭2頭ではなく何十頭も……。

この50頭にも及ぶゾウの大群とゾウ使いたちの生活ぶりをリアルにスクリーン上に表現するについては、あのハリウッド大作の『アレキサンダー』(04年)を手がけた有名プロダクションである「マッチング・モーション・ピクチャーズ」の協力を得て、2カ月に及ぶロケーションを行ったとのこと。なぜ、ゾウのシーンをとるのに『アレキサンダー』のスタッフが……？ それは、『アレキサンダー』を観たあなたならきっとすぐにわかるはず……。

2005(平成17)年5月26日記

ミニコラム

### 坂和少年がなりたかったものは……？

哲夢少年がゾウ使いになることを夢見たのは動物園を経営する家庭環境にあった。なぜか坂和少年が夢見たのは家庭環境とは縁遠い将棋の棋士。今や将棋界は羽生世代を中核として幅広い人気を集めているが、私の小中学生時代は、大山・升田の二強時代。大ニュースは1962年に若手の二上達也八段が王将戦で大山を破ったこと。私の勉強のネタは切り抜いた新聞棋譜と『将棋世界』『近代将棋』という雑誌、そし

て日曜毎の同級生仲間との名人戦。「東京に行きプロの将棋指しになる」との宣言に驚いたのは私の両親。そこで親心からか、松山に住むアマ四段との対局が実現した。最初は「いい線までいった」と思っていたが、それは完全な錯覚。自分のレベルを悟った私は、以降将棋を趣味の1つにとどめて順調な人生を。そのまま将棋の世界にのめり込んでいたら坂和少年の今は……？

2005(平成17)年10月18日記